

教育的価値	具 体 の 項 目	教育課程
2【かかわる】	<p>⑫【自分と地域社会】</p> <p>自然災害が、暮らしの変化や地域経済に与える影響について理解し、自分と地域社会との関係について考える。</p>	総合的な学習の時間
<p>【題材】 東山PR活動と東日本大震災から学ぶボランティア活動 (東京都東京タワー、宮城県気仙沼市お伊勢浜)</p> <p>【対象】 一関市立東山中学校 3年生 男子31名、女子28名 計59名</p> <p>【実践の概要・詳細】</p> <p>本校では、主体的に自己の進路を切り開く態度や、岩手の復興に寄与する態度の育成を目指し、社会体験学習やボランティア活動等を、日常の教科指導や特別活動と関連づけて行っている。</p> <p>郷土の良さを知り、「まちおこし」に寄与する態度を育てることを、復興教育の一環ととらえて取り組んだ学習旅行での東山PR活動と、気仙沼市での震災ボランティア活動の、2つの実践について紹介する。</p> <p>1 郷土東山の良さを学び、発信していく活動</p> <p>9月に行われた東京方面での学習旅行で、初めての取組として東山の良さをPRする活動を取り入れた。国内外からの観光客が訪れる東京タワーを活動場所として設定し、同時に東日本大震災の募金活動も行うことにした。</p> <p>(1) 事前学習</p> <p>総合的な学習の時間に、「What's 東山?」というタイトルで、東山の歴史、地理、人口、観光、特産物等について、資料をもとに調べ学習を行い理解を深めた。次に、特産物の中から東山和紙を取り上げ学習する場を設定した。東山和紙職人を講師に招いて「東山和紙を学ぶ会」を開き、和紙づくりの工程や東山和紙のすばらしさ、さらに作り手の苦労や和紙にかける思いを学んだ。その後、グループ活動を行った。PR用パンフレット、和紙についての説明ポスター、紙布織りコースターの3つを作成するグループと、募金活動の4つのグループに分かれ取り組んだ。紙布織りは、和紙を糸にして絹糸と共に織りあげた布地で耐久性に優れ、昔は田河津地区を中心に家庭で作られていた。今回は夏休みを利用し、田河津公民館の紙布織り講座の講師先生に、糸づくりから機織り機でコースターを織り上げるまでご指導いただいた。また、美術の時間に全員で和紙しおりの制作に取り組んだ。和紙を小さくちぎり、東山に関する絵や歓迎の言葉を描いたしおりを作り、PR活動でお話を聞いてくださった方々や募金に協力してくださった方々に差し上げることにした。</p> <p>(2) 学習旅行でのPR活動及び募金活動</p> <p>東京タワーでのPR活動は、東山和紙作りの工程説明やPR用パンフレットの配布、和紙作品の展示紹介と和紙しおりのプレゼントを行った。東日本大震災津波により被災した人たちのために募金活動「しおりのプレゼント」を行い少しでも役立てようと1時間という短時間だったが3万円を超える募金を集めることができた。募金してくださった方に和紙職人の方からいただいたはがきセットをプレゼントして恩返しできた。</p> <p><生徒の感想></p> <p>最初は人に話しかけることがなかなかできず、困っていましたが、友達と一緒に声をかけているうちにできるようになり、和紙のしおりをプレゼントしました。声をかけた人の中には「ごめんなさい」と断った人もいました。少し残念でしたが、これも良い経験だと思いました。今回の学習旅行では、この研修が一番学ぶことが多かったと思いました。PR活動の中で募金が3万円も集まった事を聞いて驚いたし、東京の人は優しいなと思いました。すごく良い貴重な体験ができました。</p>		
		「東山和紙作りの説明」
		「和紙の作品紹介」
		「震災復興の募金活動」
		「しおりのプレゼント」

2 被災地における震災ボランティア活動（宮城県気仙沼市）

被災地での支援活動や実際に被災した方々からの話を聞き、これからの復興支援のあり方や復興への関わり方を考えるとともに、「出会い」や「交流」を原点に、人と人とのつながりの大切さについて再認識させる活動を行った。

(1) 復興協会での事前学習とお伊勢浜清掃

気仙沼復興協会のご協力により、計画から事前打ち合わせ、実施指導やボランティア活動のあり方まで詳しく教えていただいた。被災したときの様子や現状まで復興してきた様子を比較説明していただいた。生徒達は、実際にその場所を目の当たりにして、驚きで声も出ない様子だった。お伊勢浜海岸の清掃活動では、今でも被災物や骨が出てくるかもしれないという説明を聞き、皆真剣に取り組んだ。



「お伊勢浜海岸清掃」

(2) 地福寺の片山和尚さんの講話

被災した当時、向陽高校の生徒174名がお寺に避難してきましたが、津波の大きさに階上中学校まで更に逃げて全員助かったという話に大変驚いた。地福寺も屋根まで津波が来て、復興するまでに時間がかかったこと、杉の下地区が壊滅した中で、海岸の先端ではケヤキの木に登り助かったこと等のお話を伺い、「命の絆」の大切さを教わることができた。



「海岸の被災物拾い」

(3) リアス・アーク美術館で被災写真展を見学し、被災当時の写真や被災物品等の生々しい展示物を見て、改めて被害のものすごさを実感することができた。



「地福寺片山和尚さんの講話」

<生徒の感想>

私は3年前に大船渡に住んでいました。私は震災の1年前に秋田へ父の仕事の都合で引っ越したので被災はしていませんでしたが、昔の家を見に行ったら中身が全てなくなっており、すごく驚いたことを覚えています。家のすぐ近くに船もあり、言葉が出ませんでした。気仙沼も見ましたが、見渡す限り被災物の山で涙が出ました。懐かしさのかけらもありませんでした。少し住んでみただけの私でも辛かったのに、実際に被災した友達や近所の人、私の知らない人もどれだけ辛かったのかなと思いました。きっと私には分かり得ないような辛さだったのでしょ。でもこうして、復興協会の方のように、希望を見つけて頑張っている人もたくさんいて、すごいと思いました。

今回清掃させていただきましたが、あの頃よりは被災物が少なくなり、少しずつ復興はしているのだなと感じました。

<まとめ>

- 1 復興ボランティア活動を通して、被災した当時の様子を知ることができた。また、今現在の復興している状況を見て、何ができるかを知ることができた。
- 2 気仙沼復興協会の方々や地福寺の片山和尚さん、東山地域の和紙職人さんや田河津地区の講師先生方との出会いや交流を通して頑張っている方々の思いを学ぶことができた。
- 3 リアス・アーク美術館で被災した写真展の見学から当時の様子を知ることができた。



「気仙沼復興協会の方々と一緒に活動を振り返る」

活動を通して、自らの生き方や地域とのより良い関わり方を学習することができた。生徒達がこれから東山地域のリーダーとして活躍していくことや今後被災した地域に関わっていく時の一助になれば幸いである。